

正宗白鳥全集

第四卷

正宗白鳥全集

第四卷

小説四

新潮社版

正宗白鳥全集 第四卷

昭和四十一年四月二十五日 發行
昭和五十一年八月三十日 セット版

全十三卷セット定價五二〇〇〇圓

著 者 正 宗 白 鳥

發行者 佐 藤 亮 一

印刷所 大日本印刷株式會社

製本所 新宿加藤製本

發行所 株式會社 新 潮 社



〒東京都新宿區矢來町七一
電話 業務部〇三三六五二二
編集部〇三三六五四二二
振替 東京四一八〇八番

亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負擔にてお取替へいたします。

正宗白鳥全集

第四卷

監
修

河上徹太郎

小林秀雄

中村光夫

山本健吉

編
集

中島河太郎

第四卷
目次

高原の怪談	九
一日の苦勞	二六
根無し草	三七
今年の初夏	六六
戦災者の悲しみ	一〇六
「新」に惹かれて	一二六
變る世の中	一二四
空想の天國	一三〇
日本脱出	一四〇
人間嫌ひ	三九一
一しづくの涙	四七〇

銀座風景……………四八四

近松秋江……………四八八

猫切丸……………五五三

青春つぶれ……………五六二

本能寺の信長……………五七一

今年の秋……………五六四

リー兄さん……………五九三

解題……………中島河太郎……六〇一

小說
(四)

高原の怪談

はしがき

私が最初軽井澤に避暑したのは、丁度二十年前であつた。それまで一度も避暑旅行といふものをした事はなかつたし、その時でも、避暑を志して信州の高原へわざ／＼出掛けたのではなかつた。歐洲大戦後の日本經濟界大景氣の時代で、東京では貸家が大拂底で、半年ばかり故郷に隠退してゐた私は、新たな住宅を東京で捜し當てるのに悩んだ果て、或知人の勧めに従ひ、その知人の周旋に依つて夏のうちだけでも、軽井澤で過すことになつたのであつた。

關西の漁村に生れ、青年時代から初老に達したその時まで

都會生活を續けて來た私には、高原に身を置いて日々山に親しむのは珍らしい事であつた。郭公やホトトギスの聲を聞いたのはじめてであつた。詩や歌で知つてゐたさういふ珍しい鳥の聲を飽きるほど聞いて感興を催すよりも、山の姿や白樺やさま／＼の草花に見惚れるよりも、晴れた日の空氣の氣持のいゝのに心が魅せられたのであつた。それは海邊の空氣とはちがつてゐた。平地の空氣とはちがつてゐた。私はこの地上に生れ落ちて以來、生きるがために終日終夜空氣を吸ひ續けてゐながら、四十の歳まで、この高原に漂つてゐるやうな空氣をしみ／＼吸つたことはなかつたのだ。

こんな空氣を吸つて生きてゐると、頭がすが／＼しくなり、心も綺麗になり、魂と云つたやうなものがあるのなら、その魂が冴え／＼として來さうに空想されたが、さう空想されるほどに、顔に觸れ、鼻の穴から體内に浸入する空氣が快かつた。しかし、實際は、生れてから絶えずさういふ空氣に浸つてゐても、頭腦が冴えて、肉體も清淨になる譯ではない事は、土着の男女に接してゐると、おのづから會得されるのであつた。下界の濁つた空氣に比べると天國の空氣を空想されるやうなこの高原にも、點々と動いてゐる人間は、從來見馴れてゐるたゞの人間であつた。

私は、雲場ヶ池のほとりのベンチに腰掛けなどして、澄んだ空、淡い雲、霧雨に煙る樹木、をり／＼の風物を眺めなが

ら、「神美しき世界を造りたまへり」と、少年の頃に夢の如く聞かされたことを思出して、少年の頃に夢の如く描出してゐた天女か天人の姿を記憶の底から取出して眼前にちらつかせたりしてゐたが、あたりにさ迷ふ老若男女が目にも觸れると、それ等は自分と同様の、下界のたゞの人間であることに、今更のやうに氣づくのであつた。

二十年前のその頃の輕井澤では、朝は早く、安部磯雄さんが家族連れで、一同慎ましやかな顔付、ゆつたりした足取りで散歩するのが屢々見られた。午前か午後か尾崎行雄氏が日課としての運動らしく、取澄して馬をあやつゝてゐるのが、たまに私の目につくことがあつた。それよりも、江木欣々女史といふ當時の貴夫人の乗馬運動は、當時の輕井澤名物として特種の存在のやうに噂されてゐた。私も、霧のなかに、馬丁を従へ、蠅叩きを手にした一婦人の乗馬姿を、たゞ一度まぼろしのやうに見たことがあつた。しかし、それ等の人々も、私の空想裡に恣まゝに浮べる人間に比べると、私に取つて甚だ稀薄な存在となつてゐた。

今年の今、私は久振りでこの高原で夏を過してゐるが、あちらこちらを散歩しながら、昔日の有名な人も、萬人同様「浮世の波」に押流されたことを、臙ろげに、多少の感慨をもつて思出しなどしたが、その頃、幾らか若い影のまだ心に残つてゐた私は、清淨な空氣のなかで、いかなる事を空想してゐ

たのであるかと回顧した。數十年前にきかゞに氣まぐれに心に浮んだ空想なんか、その時には、それが、現實の人間の形以上に濃厚であつたにしろ、明らかに的確に思出せよう筈はないのだが、偶然に私は、當時の「空想覺え書」と云つたやうなものを持つてゐる。戯曲でも作つて世間をアツと云はせようといふほどの浮かれ心でもあつたのか、戯曲の下書のやうな形で、その時の空想が現はされてゐる。

それを讀みながら、私は、高原に於ける二十年前の私の空想を回顧したあまりに、その下書を整理して、一つの完備したものを作り上げようと思立つたのである。「空想覺え書」は濕氣や埃に汚れた一握りの反古紙である。古い切れに新しいスフを綴り合せて何かの衣服として仕上げるのは、自分でも不調和のやうにも思はれるが、お互に不調和に甘んじて生きてゐる今日の浮世である。

「高原の怪談」と云ふ題目からして甚だ古めかしく、さしたる奇怪な話でもなく、むしろ低調な趣向に過ぎないのであるが、昔を偲ぶよすがとして、舊稿の題目をそのまゝに保存することにした。

場は輕井澤の雲場ヶ池。眞夏の夜がすが／＼と明けた頃。池のほとりの雜草樹木の背景として遠近の山が見え

る。山の彼方に淺間の一端が現はれ、噴煙も微かに浮んでゐる。(實際には、この池畔から淺間は見えぬのだが、舞臺の印象を鮮明にするために使用するのである)

朝が早いので、まだ誰れも出てゐない。暫くの間、自然の光景は誰れにも亂されなくて、靜かな存在を保つてゐる。

やがて、石崎優一右の方より登場。四十歳程度の、身に美しさを具へてゐない男であるが、舞臺人として、看客に醜惡な感じを與へぬだけの假裝をしてゐる。小ざつぱりした散歩服をきちんと着け、帽子でも足袋でも、汚れてゐない新しいものを着てゐるやうに見せかけてゐる。左右に眼を配らず、何か考へ事でもしてゐるやうな態度で歩いて、都合よく置かれてあるベンチに腰をおろし袂から煙草の袋を出して、一本引抜いて火をつける。

そこへ、左の方から野村辰夫がステッキを持つて登場。石崎よりも稍々若く服装は同様。朝景色を楽しんでゐるやうにあたりを目をつけてゐて、石崎の前に來て、それと氣がついて足を留める。石崎も首を持上げて、親しげに簡単な會釋をする。知人が避暑地の朝の散歩に出會つただけの何でもないやうな有様である。野村もベンチに腰をおろす。

野村 まだこちらに居つたのか。

石崎 一日一日延ばしてゐるよ。一日分だけでも餘計にいゝ空氣を吸つてゐようといふ譯だ。今も考へてゐたのだがね。

有島武郎がダブルスィサイドの決心をした時に、日本の秋を、も一度見て死にたいと云つたさうだが、いくら日本の秋景色がよくつたつて、も一度、も一度と見たがつても際限がない。僕も、一日二日と、こゝのいゝ空氣を餘分に吸つてゐたつて果てしがないから、思切つて今日の汽車で歸つたつていゝのだが、このくらゐの事でも決心がつきかねるのだ。

野村 思切つて東京へ歸るより、いつそ思切つて夏中を輕井澤で暮すことにしたらどうだ？

石崎 (微笑して) 好意ある忠告だね。自殺を止めて、もう二三年秋を見て生きて居れと云はれてゐるやうな氣がするが、自殺の原因は、夏が過ぎたつて綺麗に取除けらりやしな いんだから仕様がないう。

野村 君の譬諭は例の如く大袈裟だが、僕もこんなに早く起きたのは、家庭に一騒動あつた結果なのさ。騒ぎのほとぼりを醒ますために、珍しくも早朝の散歩を試みてゐるんだが、よく晴れた高原の朝は氣持のいゝもんだな。こせ／＼した俗っぽい争ひなんかするのは馬鹿らしくなるよ。

石崎 ところで、僕は年齢甲斐もなくこせ／＼した争ひをしてゐるんだから、年少の君に對しても恥かしい譯だね。

野村 それは何の事？（ふと訝しさに相手の顔を見る）

石崎 （訝しさに相手を見て）君は最近の僕の生活状態をよく知つてゐる筈ぢやないか。君だけには多少打明けて話した筈だし、僕の方からくどくどと話さなくつても君は大抵察してゐる筈だと、僕は思つてゐた。

野村 だけど、「恥ぢる」なんて、君が卑下した口を利くのが變に思はれる。何も恥ぢる事はないぢやないか。

石崎 さうだらうかな。僕の生活状態を知つてゐれば恥ぢるのは當り前だと君も思ふに違ひない。

野村 いゝ朝だ。不愉快な事はお互ひに思ひ出さないやうにしようぢやないか。君も朝飯前だらう。僕もまだ朝飯前だ。これからもつと散歩してよく腹を減らして、お互ひに朝飯をうまく食べる事にしようぢやないか。先づ朝飯のうまいのが、今日一日の最初の幸福だ。

さう云つて、野村が立上ると、石崎も何の氣なしに立上つて、野村の後に追隨して歩きます。それで飽氣なく舞臺は空っぽになるところであつたが、そこへ、山中平造が登場。年齢は他の二人同様四十前後らしく、身装は、洋服で麥藁帽。體軀顔面は他の二人よりも逞しく、歩きつ振りも重々しく見える。三人は一度に顔を見合はせて、意外な感じに打たれて立留まる。

野村 君も來てゐたのか。何時來た？

山中 昨夕。Kホテルに泊つてゐる。今朝は早く目が醒めたものだから、出鱈目に散歩して此處までやつて來たのだが、君達に會つてよかつた。早速だが、智恵を貸してくれ。金を貸せとは云はない。腕力を貸せとは云はない。そんなものは君達に求めるべきものでないことは、僕だつてよく知つてゐる。だけど、智恵はお二人とも相當に持合せてゐる筈だ。知識階級の錚々たる人物に相違ないのだから、友達甲斐におれに智恵を貸して呉れろよ。頭を休めに一晚泊りでこんな土地へ偶然やつて來て、早速御兩所に會つたのは天の恵みだ。……兎に角そのベンチに腰をおろさうぢやないか。立話も出來まい。

山中がベンチに下力と腰をおろすと、他の二人は氣乗りのしないらしく腰をおろす。三人は、池や淺間を後にして、見物席に向つて並んで腰をおろす。

野村 面倒な話なら、後でゆつくり伺ふことにしたらどうだらう。珍らしくこんな所で會つたんだから、晩にどこかで一しよに飯を食ふことにしようぢやないか。

石崎は煙草を吸ひながら、自分一人の考へに耽つてゐるやうな態度をしてゐる。

山中 いや、晩だの夜だのと云つてゐるうちに機會を失する恐れがある。君達の智慧を當てに輕井澤までわざ／＼來たのぢやないが、今偶然會つたのが、天の導きのやうに思はれる。この機會を取逃しちやいけない。(心からさう思つてゐるやうな有様)

野村 君は不斷さうせつかちぢやない筈だが。

山中 迷ふとせつかちにもなるだらう。……實はかうなんだ。(今までのせか／＼した口調とちがつて、急に落着いた口調になり、態度も落着いて) 今度アメリカから、僕の弟と稱する男が女房と子供と母親を連れて歸つて來るんだ。多分君達には話したことはなかつた筈だが、僕の父親は三十年も前に渡米したきり一度も歸つて來ないで、五六年前にあちらで死んだのだ。あちらにゐた日本の女に關係をつけて子供を生んで、日本にゐる家族の事は忘れて外國生活に満足してゐたらしい。初めのうちは相當の仕送りをしてくれてゐたし、僕は兎に角人並の教育を受けて、どうにか世間に生きて行ける人間になつたのだから、父親に恨みも何も無いんだ。しかし、さういふ弟には斷じて會ひたくないね。アメリカの貨幣をどつさり持つて歸つたつて、僕はそのお裾分けに預からう

とは毛頭思つてやしないし、さういふ變な親類附合されるのはたまらないよ。何だそんな事と君達は晒ふだらう。外國で落魄した身内の者が轉げ込んで來るのぢやないし、いゝ加減にあしらつたらいゝぢやないかと云ふだらう。ところが僕に取つちや、事が簡單でないんだ。(あたりを見て、稍々聲を潜めて) そいつは筋の悪い思想を有つてゐるんだ。上へは父親の故郷に歸りたいから歸ると云ふだけのあたり前の風をして、日本に、怪しからん思想を播き散らすやうな企みがあるらしい。彼方から持つて歸る金だつて、自分が正當に稼いで儲けた金ぢやなくつて、出所がよくなさうなんだ。彼方に住んでゐた或男の密告で僕も知つたのだが、その男の捏造ぢやない。詳しい事は今此處では話せないが、さういふ物騒な男に腹違ひの弟として日本に歸つて來られるのは、僕には甚だ迷惑なのだ。かゝり合ひをつけられるのも迷惑だが、僕のやうな魂の潔白な人間が邪道に入つた男と切つても切れん兄弟關係になつてゐる事が不愉快至極だよ。横濱へ上陸した所を出迎へて、兄弟初對面の挨拶と同時に、その事を詰問して兄の威厳を見せてやらうとも思つたのだが、外國で惡思想の秘密運動に年季を入れた奴は一筋縄で行かないだらうから、迂闊な口を利いて凹まされても困るからね。……どう仕末しようかと僕は迷つてゐる。

野村 君にさういふ弟があるとは知らなかつた。それは面白

いぢやないか。思想は思想、兄弟は兄弟、それは別々の關係だ。知らん顔して遠來の客を迎へたらよささうだ。封建の世ぢやなし、弟の思想のために兄までも罪を背負はされる事はないよ。君にも似合はない。何だつてそんな事を氣にしてゐるのだ。

山中 君は他人事だから冷淡にさう云つてゐられる。アメリカで死んだ親爺の遺族の顔を想像すると、瘳猛な動物のやうで氣味が悪いんだ。そいつ等の乗つてゐる船が太平洋の眞ん中で沈没すればいゝと思つてゐる。

野村 アメリカからうまい果物でも土産に持つて來てるだらうのに、船が沈没したら惜しい事だ。だが、昔とちがつて、太平洋通ひの船なんか決して沈没しないさうだから、今時分無線電信で、横濱へ出迎へて呉れと、君に宛ててたのんで來てるかも知れんね。(朗らかにさう云つて、微笑して)今朝は、こんな綺麗な朝、珍らしく三人が出會つたのに、それぞれに詰らない屈託をしてゐるから可笑しなものだ。僕は家内や子供に淺間登りを勧められて、そんな危険な、骨の折れる事はいやだと頑強に拒絶すると、甲斐性無しだと云はれて侮辱されるんで、不愉快でならないんだ。まだ老人でもないのに、女子供でも登れる山へ登れないと云ふ法はないと云つて、同行を強要されるんで、不斷えらさうな事を云つてゐる面上、餘儀なく登らなきやなるまいかと迷つてゐる。僕は富

士でも淺間でも、山と云ふ者は遠くから見ておればいゝと思つてゐるんだが、家族の者に首に繩を掛けられて引摺つて行かれるやうなていたらくだ。この石崎は石崎で、獨身で氣儘にしてゐられる癖に、死刑の宣告でも受けてる人間のやうな氣になつてゐる。我々三人ともこの頃はどうかしてゐるんだね。

山中 (相手の言葉を耳に入れてゐないやうに) いや、僕は君達のやうに悠長に避暑なんかしてゐられる身分ぢやないんだ。忙しい仕事に一日だけ暇を取つて來ただけだよ。

野村 何だ、君の言卿も暢氣至極な者ぢやないか。外國から君を目當にした暗殺團でも來るやうな事を云つてゐるから可笑しいよ。まだしも僕の方が痛切な問題だ。莫座を被つて草鞋穿きの金剛杖は厄介だ。「踏破る千山萬嶽の烟」か。(詩吟じみた聲を出して) 僕には豪傑趣味がないので山嶽踏破なんか眞つ平だね。

山中 おれは二三日餘裕があつたら淺間の噴火口を覗きに行つてもいいんだがね。山登りは面白いものだよ。(山の方を見上げる)

野村 ぢや、僕の家族の登山團に加入して一しよに登つたらどうだ? 君が加はつて呉れると、僕も張合ひがあるよ。

山中 さういふ餘裕はないが(腕時計を見て) 兎に角、折角來たのだから、今日一日は俗務を忘れてのんびり遊びたいものだ。御兩所には僕の静養のお相手をして呉れないか。